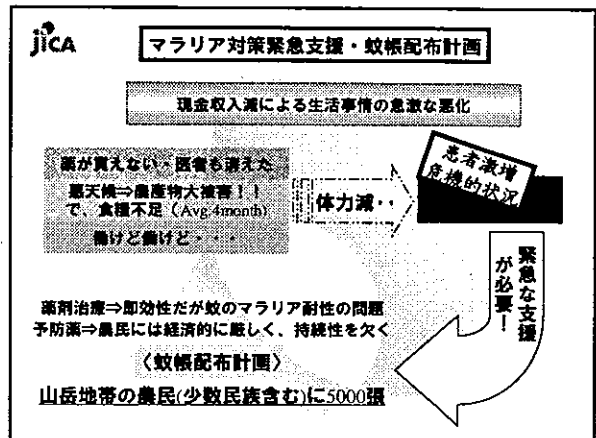
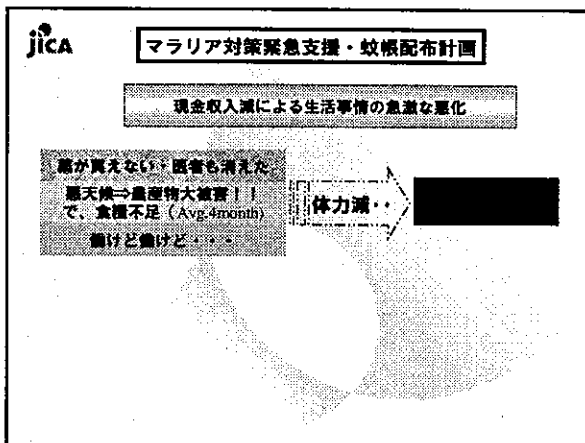
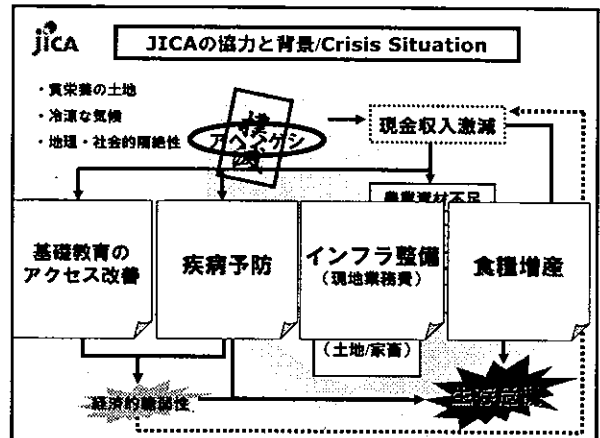
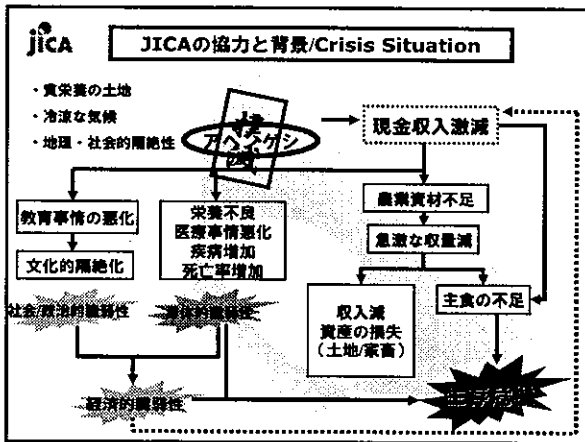
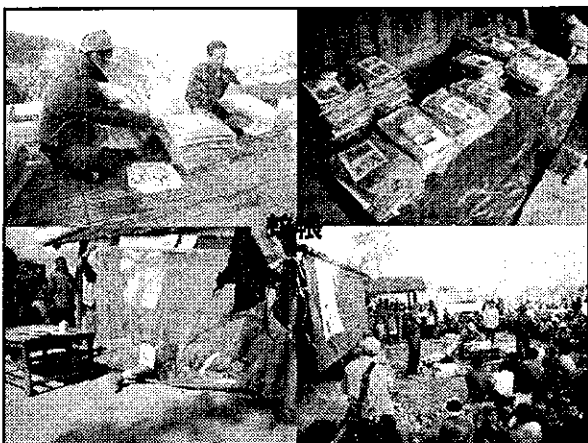
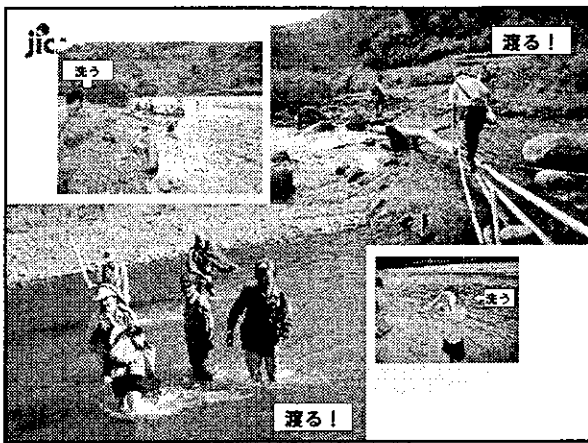


jica

IV. 活動事例紹介

～マラリア対策緊急支援・蚊帳配布～





シャプラニールの農村開発

Bangladesh の経験から



Mission of SHAPLA NEER

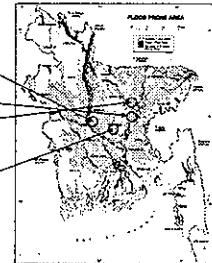
- 市民の自発的参加と責任に基づき、南北問題に象徴される現代社会の様々な問題の解決のために必要な海外協力等の諸活動を行い、すべての人が持つ豊かな可能性が開花する社会の実現をめざす。

Organizational Facts

- 1972年設立、2001年8月NPO法人格取得
- 特定の政治、宗教、企業、団体から完全に独立
- スタッフ数: 日本人15人、ベンガル人13人、ネパール人4人
- 活動国: バングラデシュ、ネパール
- 支援者総数: 約10,000人
- 2004年度の総収入: 2億1,900万円
 - 30%: 会費、寄付金
 - 27%: 政府補助金、民間助成金等
 - 43%: 手工芸品販売、国内活動収入等

Project Areas in Bangladesh

- 農村開発
 - マニクゴンジ県ギョール郡、ドウロトプール郡 (STEP)
 - ノルシンディ県ベラボー郡、ライブラ郡 (PAPRI)
 - マイメンシン県イシヨルゴンジ郡 (COLI)
- 都市開発
 - 首都ダッカ市内、サイダバッド、ジャットラバリ地区
- 緊急救援
 - 大規模な災害時、必要に応じて



Old Strategy

- 貧困層のエンパワーメントを目指して
- ターゲットアプローチとしてのシヨミティ支援
 - 1グループ、15~25人で構成
 - 同程度に貧しいメンバー
 - 毎週一度のミーティング
 - 共同貯金、会計管理、生活上の諸問題を議論
 - 収入向上のための投資活動、研修、マイクロクレジット

Program for Samity

- Capacity Building
 - 成人識字、保健教育、グループ研修、etc.
- Service Providing
 - 簡易衛生トイレ、手押しポンプ井戸、児童補習教育、etc.
- Economic Development
 - マイクロクレジット、技術研修

Achievement

- のべ38,000人以上が成人識字学級を受講、修了
- 14,000基以上の簡易衛生トイレを設置
- 2,900基以上の手押しポンプ井戸を普及
- のべ2,000以上のショミティにマイクロクレジットを提供
- 自然災害時の緊急救援活動(サイクロン、竜巻、洪水)

Key findings / Problems

- 村人の生活改善に関する意識の向上
- 基礎的な生活レベルの向上
- 10%ほどのショミティが毎年ドロップアウトしてしまう
- 自立的なグループ育成の難しさ
- 最貧困層が排除される傾向
- 富裕層の乖離(かいり)

Challenges

- 既存のショミティ方式の見直し
- 最貧困層への取り組み
- 機能的、目的指向型のグループ育成
- 基礎的なインフラ充実の必要性
- コミュニティ、自治組織の再活性化
- 地方行政との連携促進
- ローカルNGOとの連携強化

New Strategy

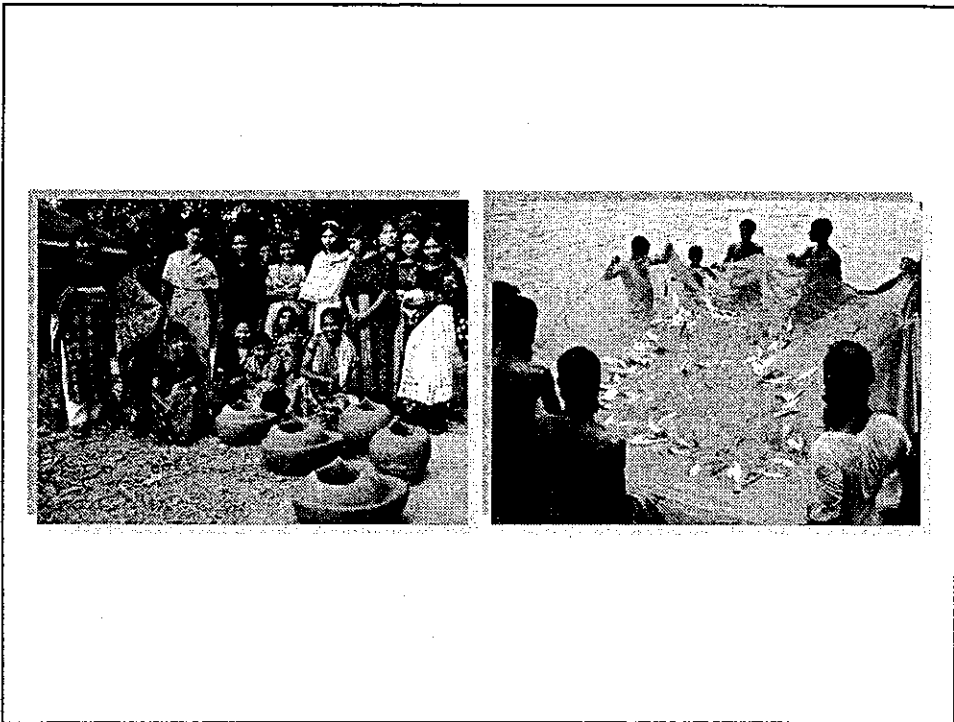
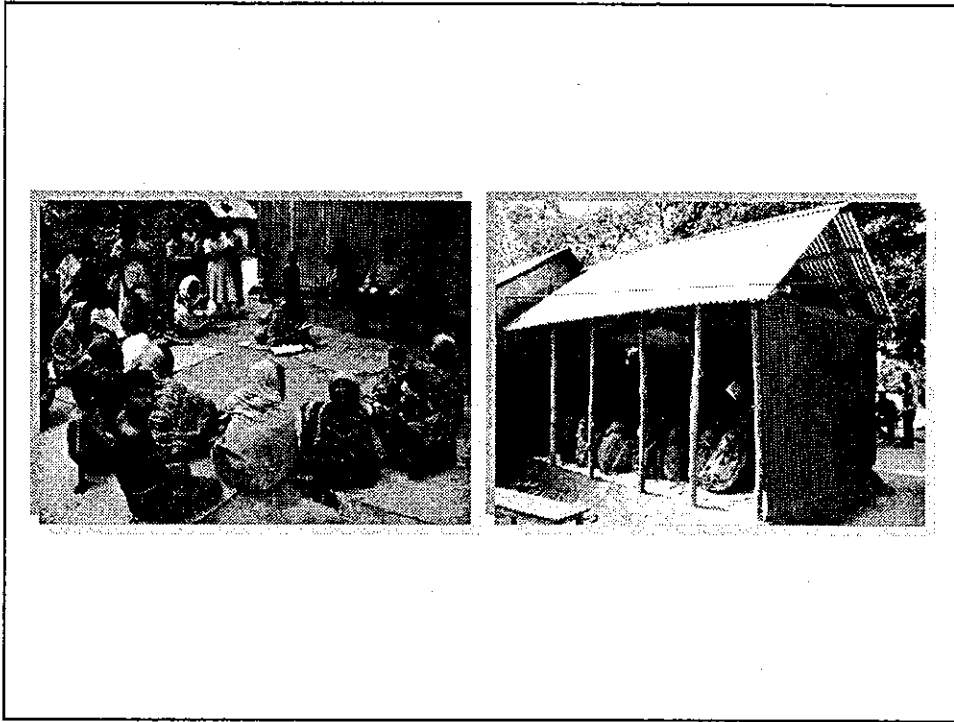
- ターゲットアプローチとしてのショミティ支援の継続
- コミュニティアプローチの導入
 - 中間、富裕層への働きかけ
 - 最貧困層への裨益
 - 目的別、機能別グループの結成
 - 行政、ローカルNGOとのパートナーシップ
- JICAとの連携

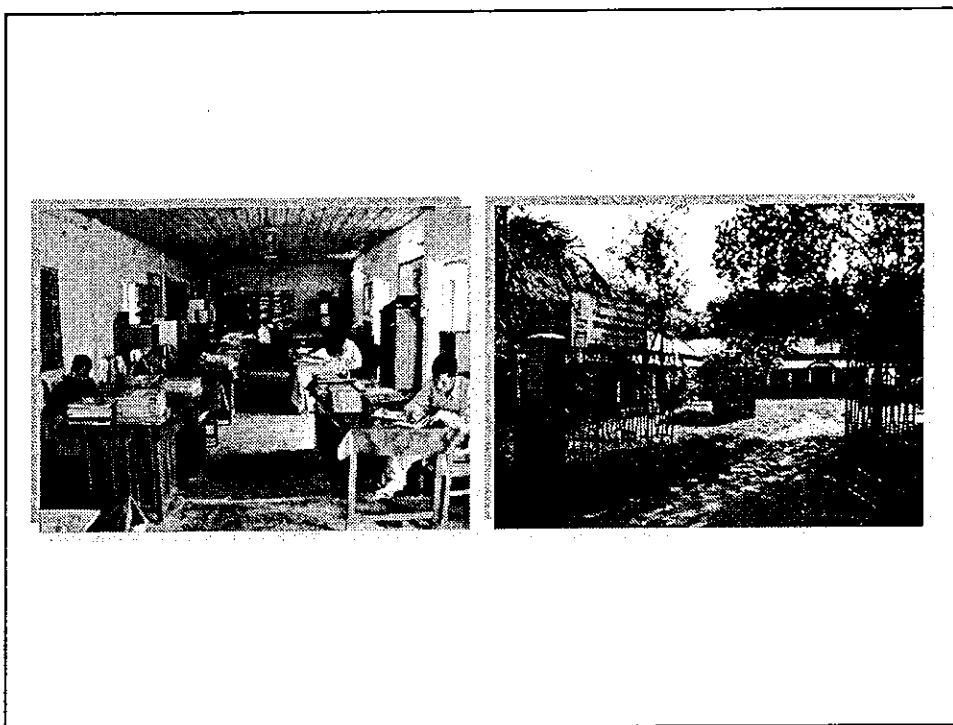
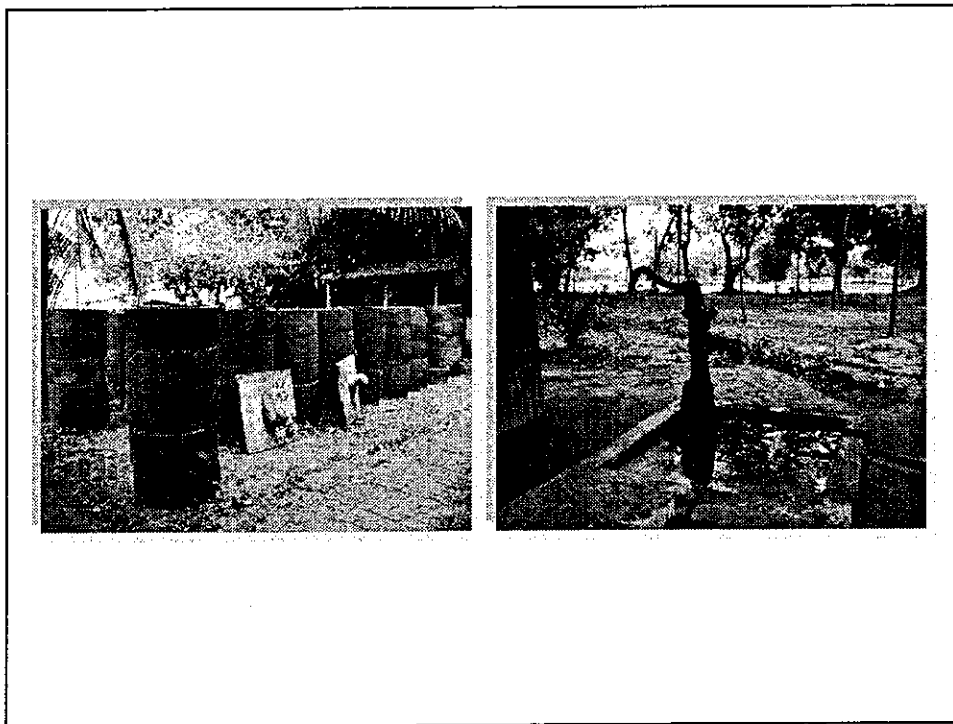
Partnership with JICA

- 開発パートナーシップ事業
 - 2001年8月～2004年7月
 - 3年間で総額、1億1,470万円(東京からの出張経費等も含む)
 - 第1回JICA賞受賞(2004年12月に授賞式)
- 草の根技術協力事業(パートナー型)
 - 2004年8月～2007年7月
 - JICAからは3年間で総額5,000万円が上限

Challenges of New Strategy

- 最貧困層への対応手法の確立
- 福祉的な分野にどこまで関わるのか
- 進まない行政との連携
- 富裕層の不在地主化
- コミュニティへの政治の浸透
- ローカルNGOのキャパシティビルディング





5. 分科会及び全体会 I 発表

1. 概要

ワークショップに先立ち行われた事例報告により、参加者は状況や問題を共有することができ、また現場経験の少ない参加者にとっては具体性を持って議論に臨むことができた。参加者は8～9名程度の4グループに分かれ、各グループにはそれぞれ2名のファシリテーターが入り、報告された事例について人間の安全保障の視点から分析し、議論した。以下、各グループのファシリテーターより内容を報告する。

2. グループ分け

グループ	NGO 側参加者	JICA 側参加者	ファシリテーター
A	飯澤 幸世 色平 哲郎 大原 佳菜子 松本 理恵	神谷 祐介 神保 尚美 西村 拓 下谷 典代	戸賀 竜郎 向井 一郎
B	清水 貴夫 船橋 周 古澤 真理子 森 ちえろ	飯塚 健一郎 岩崎 真紀子 三浦 禎子 柳川 伸二	尾関 葉子 石上 俊雄
C	池田 晶子 下田 理 橋場 美奈 渡辺 直子	岩井 伸夫 渋谷 優子 西村 恵美子 福永 敬 森 悠介	古澤 めい 竹内 康人
D	会田 伸子 市川 和佳子 川村 暁雄 椿原 恵	青木 英剛 大井 明子 久保 良友 坂口 幸太	長 有紀枝 神内 圭

【A グループ】

戸賀 竜郎



1. 分科会の議論の概要

A グループでは、最初に自己紹介を兼ねたアイスブレイクを行い、お互いの所属と名前、顔が一致するようにしてから議論に入った。議論の進め方としては、できるだけ発言に偏りが出ないように、一人一人の発言を引き出すことを意図して、全員が発言しやすい人数（経験則で4～5人とされている）にするために、グループ内を2グループに分けて議論を進め、途中で両グループ間で議論したことを共有し、更に議論を深めるという流れで行った。

(1) 人間の安全保障への視点を抽出

グループワーク I では、直前のパネルディスカッションのパネラーからのインプットと投げかけを踏まえ、人間の安全保障の考えを整理し、次の事例発表を分析する上で、どのような視点から事例分析を行うか、Aグループなりの視点の抽出を行った。グループ間で共有された視点は、「オーナーシップ」「参加型」「弱者への配慮」「(地域間等の)格差」「BHN」の5点であるが、特に「オーナーシップ」とは「何に対して、誰が持つ」ものなのかを深く議論し、確認したことで、事例分析の押さえるポイントをより明確に持てた。

(2) 事例分析を通じた視点の深化

グループワーク II、IIIでも、2グループに分かれていたことを利点として、NGO事例分析チーム、JICA事例分析チームに分かれて、グループワーク I で抽出された視点を中心に分析を進め、Aグループなりの改善ポイントの抽出まで行った。具体的な事例の分析に基づいて、人間の安全保障の視点を考えることで、そ

これまで漠然としていた「時間軸」の概念が明確に意識されるようになった。この「時間軸」の概念が導入されることで、それまでバラバラだった視点が再度整理され、個々の視点が有機的に結ばれるようになったと思う。

2. 所感

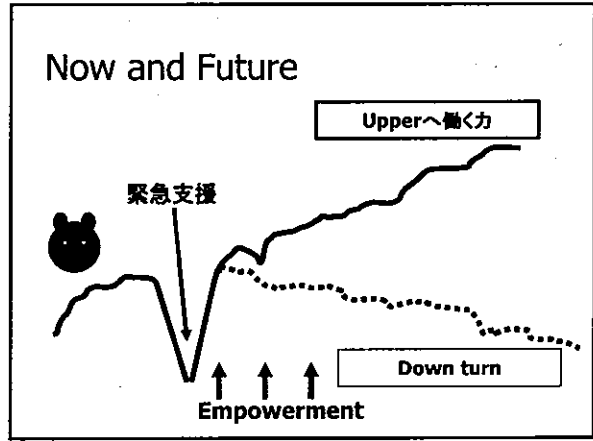
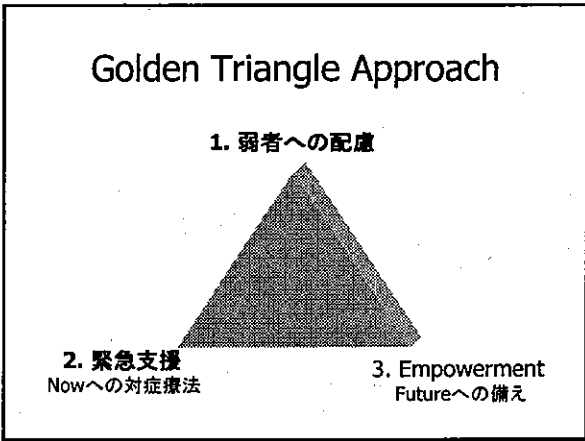
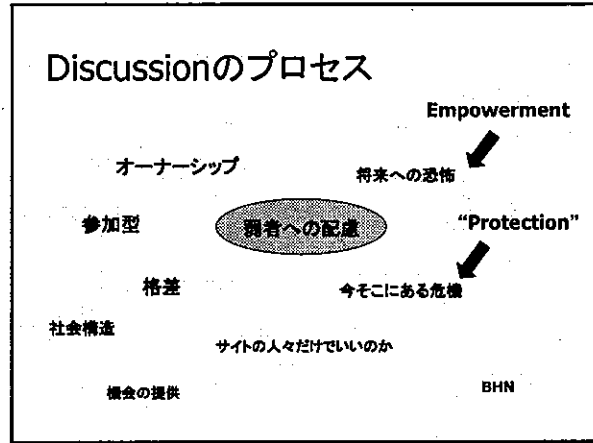
今回のテーマは NGO、JICA 双方にとってチャレンジングなテーマであったと思う。「人間の安全保障」は JICA のメインストリーミングの流れとは対照的に、NGO では話題になることも少なく感じていたからだ。当初は NGO 側の参加者の議論に対する反応を気にしていたが、NGO、JICA とともに、参加者全員が積極的な議論を展開し、白熱した分科会となった。

ファシリテーターとしては、参加者の積極性を促すことで、自然とグループ内での役割分担ができ、議論が自立的に展開されることを期待するとともに、一人一人の意欲的な参加・発言がお互いの刺激となることを期待していたが、A グループの参加者の積極的な姿勢により、実現されたと思う。



全体会 I での A グループ発表

ザ・ひゅーまん セキュリテーズ



1. 弱者への配慮

シャプラニールの事例	JICAの事例
<ul style="list-style-type: none"> シヨミティ シャプラニール 	<ul style="list-style-type: none"> コーカン地区住民 中央政府 コーカン特別行政府 JICA

誰が決めるか

2. 緊急支援(対症療法)

シャプラニールの事例	JICAの事例
<ul style="list-style-type: none"> 災害時の支援 	<ul style="list-style-type: none"> 種子・肥料・医薬品・蚊帳の配布 道路改修

3. Empowerment(予防策)

シャプラニールの事例

- マイクロクレジット
- 識字教育
- 共同貯金
- 技術研修
- 児童補習教育

JICAの事例

- 食料増産支援
- 基礎教育のアクセス改善
- 疾病予防
- インフラ整備

改善点:シャプラニールの事例

1. 弱者への配慮

- 最貧困層への福祉的アプローチ
- リーダー育成⇒社会変革の担い手

2. 緊急支援

- いまそこにある危機への対応(危機的状況にある人の把握)

3. Empowerment

- リーダー育成
- 政府へのアドボガシー
- 他のNGOとのネットワーク形成
- 社会・文化への配慮

改善点:JICAの事例

1. 「弱者」への配慮

- 「弱者」の定義

2. 緊急支援

- 対象地域の拡大
- 韋駄天

3. Empowerment

- 対象者のニーズ
- Awareness
- 住民の理解向上
- 参加型開発手法(アプローチ)
- 農業の運営管理能力の向上

インプリケーション:Human Security Friendlyなプロジェクト(プログラム)実施にむけて

- Now and Future

⇒Input(緊急支援とEmpowerment)のタイミング

- 夢をあきらめないで!あなたの夢は?

⇒弱者への対応をどうするか、自律発展性

- 全体とのバランス

⇒マルチセクター(分野課題)、弱者以外への対応、アクター間の連携

【Bグループ】

尾関 葉子

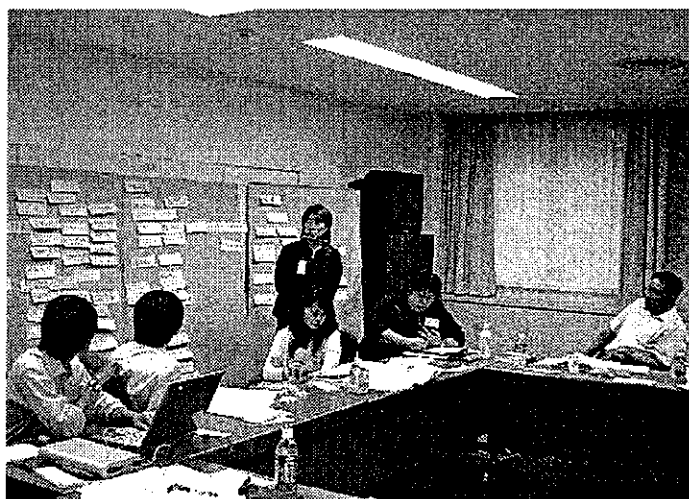
1. 分科会の議論の概要

(1) 進め方

Bグループでは、全体講義の前の食事時間中に簡単な自己紹介を行うと同時に、参加するにあたっての個々人の「期待」と「不安」を全員で共有した。講義後の議論では、まず課題、視点の洗い出しをし、仮の定義を出した。事例紹介後は、グループを事例で二つに分けてそれぞれ自分たちの視点を基に分析し、改善案（グループごとの改善案、NGOの改善案とJICAの改善案）を作成した。

(2) 「安全保障」についての議論

「包括的過ぎて事業に落とすときに課題が大きすぎる。きれいすぎて実現可能性はあるのだろうか?」、「なぜ今人間の安全保障なのか?」「概念の多義性」、「どこまでが人間安全保障なのか?」、「誰にどうアプローチすべきか?」、「人間安全保障のエッセンスは“人権”にあるのでは?」、「外交と人間の安全保障のどちらが優先されるべきなのか?」などの率直な感想や疑問の後、自分達の考える重要な視点や課題の洗い出しを出した。



Bグループの考える人間の安全保障の全文は、別頁にある通りだが、視点としては、「多様性（包括的）、（組み合わせ）」、「人」、「エンパワメント」、「Down Turn」が重要であるとした。また、概念についてはNGOとJICAでは異なるという意見（NGOはまっすぐ人に行くが、JICAは国を前提とした安全保障）という意見も出た。「評価」もキーワードとして出たが、今後の課題とした。

「エンパワメントって何？」という自問自答も行い、行政のエンパワメントと人々（住民）のエンパワメントの違い（前者はキャパシティビルディング、後者は気づき、意欲、これ以上悪くならないための生活力をつけることなど）が挙げられた。

（3）事例についての議論

事例については、時間不足等の関係から、不明確な点が残ったまま分析に入らざるを得ず、想像から議論するという場面もあり若干の苦労があった。とはいうものの、特に NGO の事例には、過去の経験を包み隠さない発表に参加者は一様に感銘を受けたようであった。また、ある人々の人間の安全保障を得ようとするとき、他者の人間の安全保障が阻害されるという現実的な課題に直面する場面もあった。

改善案についてはそれぞれの事例を前述した視点を基に分析、改善案を作成した。その後、さらに NGO が行う改善案、JICA 改善案の二つを作成した。成果は別頁にあるとおりだが、中でも JICA 事例の改善案の中に、「住民の I/D を発給させること」という点が含まれていたことは特筆すべきことであろう。議論では JICA による実施ではなく NGO による実施策に含まれることとなったが、今後具体的な業務で出会うであろう問題だけに的を得た指摘となったと思う。

2. 所感

最初から最後まで全員が真剣に課題に取り組んだ 3 日間であった。欲を言えば、多様性を意識するあまり、連携ありきの姿勢が強かったのが若干気になった。「自分達はこれはできない」と活動を制約しているのは他ならぬ自分達ではないか、という疑問を常にもって事業展開に挑んでもらってもよかったかと思う。また、ドナー側がイニシアティブをとる連携ではなく、主体であるはずの住民または行政主導の連を模索するのも一考だったのかもしれない。

とはいうものの、参加者は、いずれも自分たちが他者（ドナー）であるという立場を十分認識して事例の中で真摯に住民たちと向きあい、すべての人々の生活向上に向けての策を短い時間の中で試行錯誤していた。毎年のことだが、その真摯な姿には感銘を受けた。今回の議論が今後の業務の中で生かされていくことを願ってやまない。



Bグループの考える人間の安全保障とは・・・

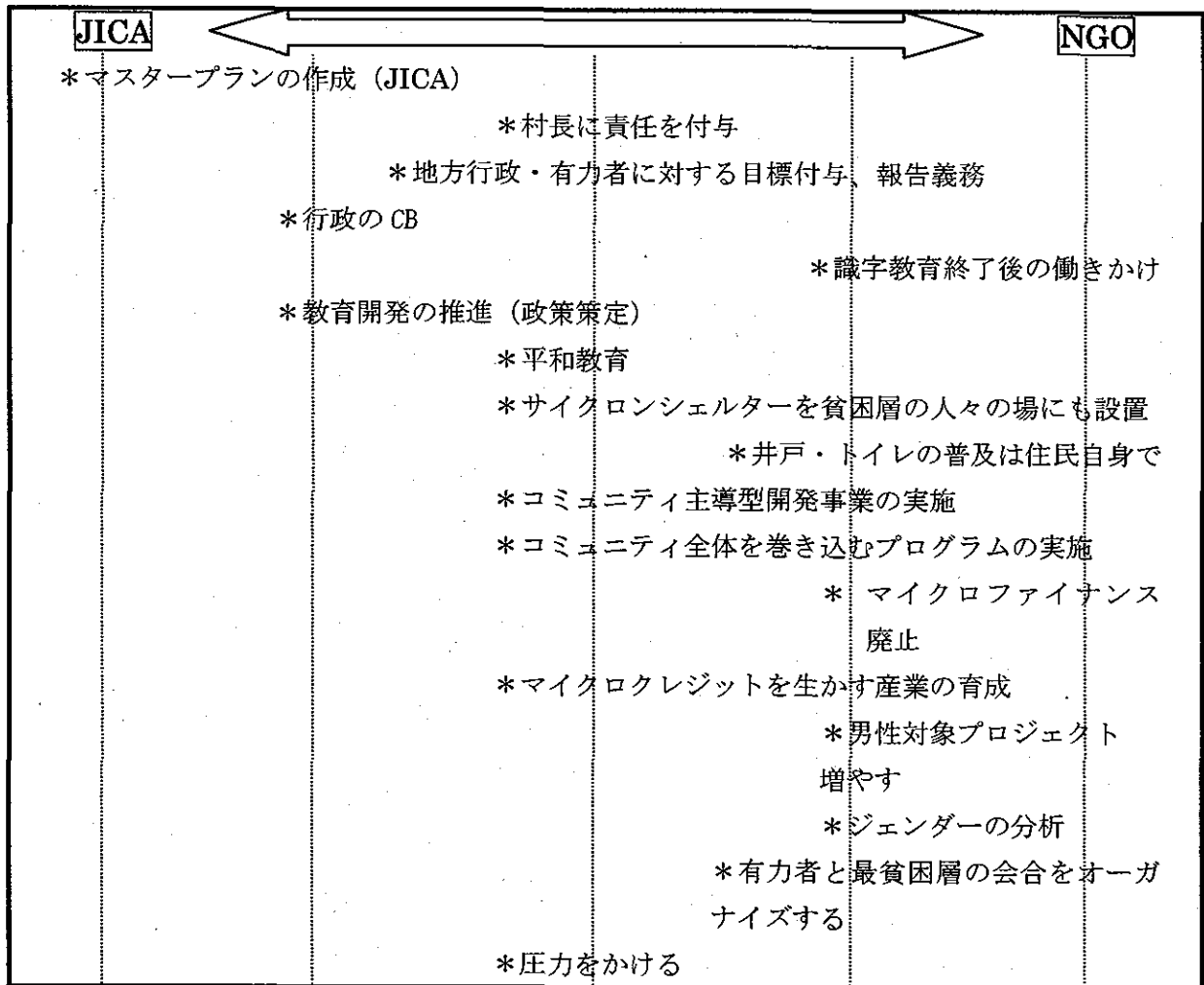
平和で自由に人々が生きていく社会づくりは、世界の共通の使命。その使命を果たすためのすべての人たちの共通理解。

理解1:あらゆる人により、また多様で包括的な方法により取り組む。

理解2:危機にさらされている人たち、危機に陥る可能性のある人たち、今まで対応できなかった人々たちに対するエンパワーメントに重点を置く。

*評価については、今後の課題

シヤプラニール バングラプロジェクト改善点 (JICA、NGO のできること)



- 村長に責任を付与
 - 村長を人から尊敬される立場にする。
 - 研修員として日本に招聘することは可能。ただし、これは権力付与に当たるのではないか。
- 平和教育
 - 中長期的な平和構築には貧困層へアプローチ必要。
- コミュニティ主導型開発事業の実施、コミュニティ全体を巻き込むプログラムの実施
 - 村人の動機付けは NGO が得意、行政のシステム作りは JICA が得意。トップダウン・ボトムアップのアプローチは、人間の安全保障の視点に合致。
- 協力隊と NGO の連携について
 - 協力隊員の活動地域と NGO の活動地域が競合することはないのか。
 - NGO のカウンターパートに協力隊が入っていて一緒にプロジェクトを役割分担を決めている NGO もある。(これは理想的な方式)

- ▶ NGO の活動に協力隊を派遣できるように将来的にはしてほしい。
- マイクロファイナンスがお金を集めるという時点で貧困層が参加できないのであれば、そもそもマイクロファイナンスをやめてみたらどうか。
 - ▶ 大人の人間の心理としてマイクロファイナンスなしで、毎週人が集まることはできるのか。
 - ▶ 原資をプロジェクトサイドから出すのではなく、マイクロファイナンスを自分たちで共同貯蓄をしていくという方式に発想の転換をしたらどうか。
 - ▶ マイクロクレジットは逆にコミュニティを作るよりどころになってしまっているのではないか。
 - ▶ マイクロファイナンスがあつてショミティが成り立っているのも事実、マイクロファイナンスが問題になっているのも事実。
 - ▶ マイクロファイナンスのメンバーになると常に隣組に監視されている気がする人もいる。
- マイクロクレジットを生かす産業の育成
ラオス、モンゴルなどで一村一品運動（ただし、マクロの視点）のイメージ。
- シャプラニールの団体評価を JICA ができないか
 - ▶ 事前評価と事後評価を JICA 専門家または職員にお願いできないか。彼らは経験もあるし、よいパートナーシップが生まれるのではないか。NGO 側から要請があつたときに JICA が制度として受けるか否か。コンサル的にアドバイスできないか。それは JICA でなくて、NGO 同士評価することもできるのではないか。
- コミュニティのディシジョンメイキングは男性。ショミティは女性対象というイメージ強い。男性ショミティを多く組織し、コミュニティのショミティへの協力を増やす。
- ジェンダーの分析
寡婦へのアプローチ
- なぜ、バングラは腐敗しているのか。
 - ▶ 日本は富国強兵の頃にすでに教育が普及していたので、民主主義にうまく移行できたが、途上国の状況はそれにあてはまらない。
 - ▶ 権力者が情報を独占しているので、情報が普及するシステムづくりが必要。

JICA ミャンマー麻薬撲滅プロジェクト改善点

①状況の把握

- ・ 地域の状況を分析する

②緊急性

- ・ 短期的な対策を重視する
- ・ 緊急人道支援（短期的）と開発支援（中長期的）を明確化
- ・ 食料の提供

③公衆衛生対策

- ・ 保健センターの設置
- ・ 予防教育の重視
- ・ 公衆衛生隊員の派遣

④自立発展性

- ・ 職業訓練実施
- ・ 自給に中心をおく
- ・ ローカル NGO を組織する
- ・ ローカル NGO と行政の連携
- ・ 住民自身が組織化を担う
- ・ コミュニティにプロジェクトを考えてもらい資金を出す
- ・ 共同耕作のシステム構築
- ・ ローカルナレッジの掘り起こし

⑤圧力（人権・Human Security）

- ・ プロジェクト関係者に ID を発給させる

（提案） NGO と JICA のそれぞれの立場に立って、改善案を考える。

①状況の把握

NGO の立場→ローカルのカウンターパートと一緒に村を訪ねてヒアリングする（マイクロベース）

JICA の立場→行政官からヒアリングなど→マクロベース（マイクロの情報は拾えない）

②緊急性

NGO の立場→食料配給。マルチな関係（NGO だけでできるものではない）

JICA の立場→インフラ整備であれば可能（緊急開調）。食糧援助の場合は外務省が実施。

③公衆衛生対策

NGO の立場→コーディネーター、保健センター（ヘルスポストレベル）設置可→すぐに派遣

JICA の立場→青年海外協力隊員（ミャンマーは隊員派遣不可）、専門家、保健センター設

置可（ナショナルヘルスポストレベル）

→緊急援助隊（レスキュー隊、医師チーム）とは別。

④自立発展

- ・ 職業訓練実施→NGO、JICA どちらも可能
- ・ 自給に中心をおく→NGO、JICA どちらも可能
- ・ ローカル NGO を組織する→NGO
- ・ ローカル NGO と行政の連携→NGO
- ・ 住民自身が組織化を担う→NGO
- ・ コミュニティにプロジェクトを考えてもらい資金を出す→NGO
- ・ 共同耕作のシステム構築→NGO
- ・ ローカルナレッジの掘り起こし→NGO

⑤圧力（人権・Human Security）

- ・ 政府に働きかけ、プロジェクト関係者に ID を発給させる→NGO



1. 分科会の議論の概要

(1) 人間の安全保障の視点の整理

事例紹介を受ける前に、その後の事例分析をどのような視点で行うかを整理した。グループ間で共有された視点は、「人間の安全保障の人間とは何かを意識しながら分析すること」、「エンパワーメント」、「アクター間の連携」、「評価」の4点。事例分析の視点を共有することにより、各自の疑問点を明確にして事例紹介に臨めたことが、分科会での分析に有意義となった。

(2) 分析の概要

ワークショップの詳細は、後掲のプレゼンテーション資料に譲るとして、ここでは、主な議論を紹介することとしたい。

- ・現状より悪化した状態になることを避ける視点はあるが、最貧困層への対応をどのように行っていくのかが、より大切ではないか。
- ・NGO、行政などアクター間の連携が、プロジェクトの計画段階からあるとより効果的な事業展開ができるのではないか。
- ・NGOにとっては、JICAとの連携は、活動が点から面につながる可能性がある。
- ・事業評価も重要である。人間の安全保障の視点を取り入れた協力についての評価はプロセス重視の評価となるが、そのような評価手法を確立していく必要がある。

2. 所感

他の頁でも触れられているであろうが、今回のテーマは実に手ごたえのあるテーマである。果たして活発な分科会になり得るのかという不安も抱きながらの分科会開始となったが、参加者全員が議論に積極的に参加し、充実した分科会となった。そして、議論の過程で、アクター間の連携の必要性に議論が自然に至った。連携ありきではないことは当然のことであるが、住民に裨益する事業展開のために必要であれば、連携するということが参加者間で共有された。今後、今回の学びを実際の事業展開に是非生かしていただきたい。



Cグループ

＜分析の視点＞

1. 人間(?)の安全保障
2. エンパワーメント
3. アクター間の連携
4. 評価

1. 人間(?)の安全保障

シヤプラニール **人間(?)の安全保障** 分析結果

ミッションがぶれていない

最貧困層に入り込めていない

ローカルNGOは最貧困層に入り込めるのか？ローカルNGOでない、NGOだからこそ入り込めるアプローチがあるのでは。

JICA **人間(?)の安全保障** 分析結果

国家の安全保障(麻薬撲滅)の被害者

人間の安全保障と国家の安全保障の利害の対立

人間の安全保障の出番

背景

国家)コーカン特別区から↑

コーカン地区)地区・行政官から↑

なくなる現金収入に反対の声は？↑

2. エンパワーメント

シヤプラニール **エンパワーメント** 分析結果

シヨミティを対象としたアプローチ

シヨミティのSafety Net(教育・保健衛生)

ローカルNGO独立自立のエンパワーメント

波及効果に対する仕掛けが足りなかった

JICA エンパワーメント 分析結果

Safety Netの構築が欠けている
明示されていない

保護(蚊帳の配布)の後のエンパワーメントの難しさ

エンパワーメント 提案

Social Safety Net構築のための組織化を
プロジェクト計画書に明示する。

蚊帳配布後のモニタリング

予防・予測対策の構築が必要

エンパワーメント 課題

最貧困層への波及効果にもっと大きな
優先順位を

最貧困層へのエンパワーメント

元から最貧困層への視点がH.S.の考え方に欠け
ている

Down Turnへのアプローチはある。それより悪い
状態にある人へのアプローチが欠けている。

3. アクター間の連携

シナプランール アクター間の連携 分析結果

(JICA-NGO連携)行政サービスの橋渡し
政府が注意を向けてくれるようになった

上・下からのアプローチ

JICA アクター間の連携 分析結果

行政サービスの巻き込み

経済界とのつながりがうすい

AMDA, World Visionが当該地域で活動して
いる。現状は意見交換のみ。

アクター間の連携

提案

計画の段階からNGOをパートナーに

経済界とのつながり強化

JICA連携の可能性(点から面へ)

4. 評価

シナプスラニール

評価

分析結果

JICA

人間の安全保障(時間がかかる性質のもの)に軸を置いた評価の仕方が確立していない。

シナプスラニール

評価

提案

JICA

プロジェクトの5年後、10年後の評価はできないか

「手法」の確立

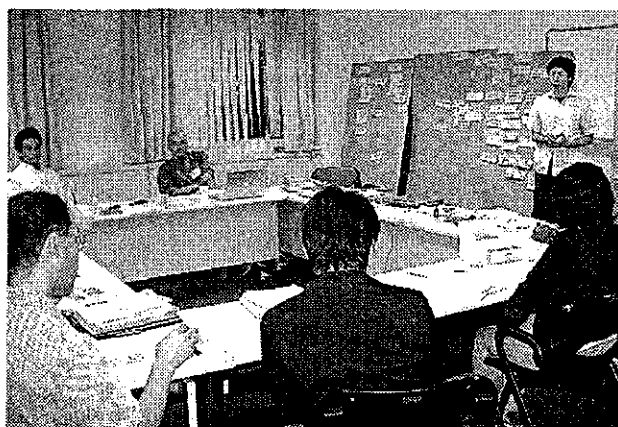
NGOの外部評価/NGO同士の相互評価

学び

全ての視点は相互に関連している

【D グループ】

神内 圭



1. 分科会での議論

(1) グループワーク 1 (共通の視点)

Dグループは、自己紹介に続いて、講義とパネルディスカッションの内容を全員で振り返り、各自の問題意識を共有するための自由討論を進めた。その結果、これまでの開発理念に比べて、「人間の安全保障」は何が新しいのか（その付加価値は何か）ということが共通の関心事項であった。

その後、JICAの「7つの視点」を参考にしながら、事例分析に向けたグループ共通の視点として4点（社会的弱者、エンパワーメント、問題の構造、連携）を設定した。これらは抽象的な概念であるが、だからこそ、具体的な事例分析のなかで検証したとき、「人間の安全保障」をより深く理解することにつながるであろうと考えられた。

(2) グループワーク 2 (事例分析)

事例紹介を受けた後、グループとして設定した4つの視点に基づいて、NGO（シャプラニール）、JICA双方の事例を詳細に分析した。

分析を進めるなかで、マクロからの方向性で緊急的・保護的な活動から着手したJICA事例においても、ミクロからの方向性でエンパワーメントを重視してきたシャプラニールにおいても、「より貧困・脆弱な人々にいかにアプローチするか」が今後の課題として認識された。”Down-turn Risk”に対してより脆弱な人々へのアプローチを「現場」で取り組むことの重要性、そして実践の難しさが、具体的事例を通じて認識された。

エンパワーメントという概念自体の抽象性についても議論が及んだ。内発性

と外部者の役割、保護と保障、権力・権利（人権）との関係、心理・意識の側面…。開発に携わる者はエンパワメントという言葉在日常何気なく使うけれども、あらためて考えてみた時、それがいかに深遠なテーマであるかに気付かされた。

「問題の構造」は、両事例に沿って考えるなかで、様々なスケール・側面の事柄が関係してくることが認識された。問題の構造要因に分析を加え、問題の根本にアプローチすることの重要性が共通認識されたといえる。しかしながら、両事例の詳細情報が不明ななかで、リソースパーソンからの補足情報を得ても、具体事例を深く掘り下げて分析する作業には自ずと限度があった。

事例分析を終えた後、その結果を振り返りながら、あらためて「人間の安全保障」の意義を考えた。4つの視点に沿って検証した結果、両検討事例とも、アプローチにさらなる改善が必要と思われる事項が抽出された。同時に、NGO、JICAそれぞれのアプローチの違い、得手不得手、そして連携の可能性についても、以前よりも明確に認識することができた。

国際協力に携わる者同士が、違いを超えて連携し、得手不得手を補い合って、より広いインパクトを与えるためには、何らかの共通理念が必要である。「人間の安全保障」の特性である包括性は、関係するアクターが意識を共有するための共通のツール（意識化のツール）として有用である。一方で、その多義性が関係アクターごとの恣意的な解釈を経て同床異夢の連携関係につながったり、「人間の安全保障案件」のラベル張りが目的化してしまう危険性に留意する必要がある。Dグループは、そのように結論付けた。



2. 所感

Dグループは、事例分析作業が一通り終了した後も、グループが辿った議論の過程を振り返り検証しながら、最終結論（現時点で、「人間の安全保障」をどう捉えたのか）に向けた議論が深夜まで続けられた。その自主的かつ真摯な取り組み姿勢に感銘を覚えたと同時に、ファシリテーターとしては、夜遅くまで議論を続けたことに進行上の配慮が不足していたかもしれないと反省する次第である。

以上

NGO－JICA相互研修

グループD発表

JICAの人間の安全保障の
7つの視点から3つの視点を抽出

- ・「社会的弱者への裨益を重視する」
- ・「エンパワーメントを重視する」
- ・「みんながつながるツール！」

3つの視点を選んだ理由

- ・「社会的弱者への裨益を重視する」
- ・「エンパワーメントを重視する」
→JICAとNGOの間で概念が一致していないため
JICAの人間の安全保障の7つの視点をそれぞれ検討していく
中で、これら2つは重要な要素だが、概念が整理されておらず
多様な解釈が可能である
- ・「みんながつながるツール！」
→各援助アクターが有機的に連携するために「人間の安全保障」
というツールを活用できると考えられるため
様々なアクターや他ドナー、NGO等が柔軟に連携すること
によってよりインパクトを生み出すことが可能と考えられる

4つ目の視点？

「問題の構造を分析し、その解決
に向け総合的に取り組ん」だかを
分析を試みたが、その材料が整わ
なかったため、作業の対象外とし
た。

バングラデシュ事例の検討

事例分析

1. 当初は最貧困層への視点が欠けていた
2. 地域住民の主体性が創出された
3. JICAの名を使ったことにより相手国政府との信頼関係が築くことができた

バングラデシュ事例の検討

教訓

分析1から

1. ニーズアセスメントの見直しによりターゲットグループの漏れをなくす
2. 他のリソースによる支援がなされるよう、最貧困層に届いてない状態を明るみに出す
分析3をより探求すると
3. JICAならではの制度構築を支援！！

何故、我等は**教訓**としたか？

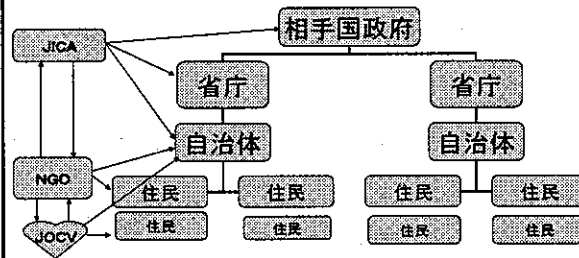
案件自体の改善案というよりは、20年間活動を通して得た知見を、「今後の案件形成への教訓としよう！」という熱い思いから。

ミャンマー事例の検討

事例分析によってえぐられた課題

1. 対象住民の絞込み: 対象とする人々を決めるべきところを、対象地域として選定してしまったため、裨益する人々の顔が見えなくなってしまった。
2. 保護的・緊急的側面が強い
意識・心理的側面が弱い
3. プロジェクトの集合体(プロジェクト間の連携がない)

一人一人の笑顔のために 私達に出来ること



ミャンマー事例の検討

人間の安否を盛り込んだ改善案

1. アクター間の分担の明確化及び共同実施を行うことにより、最貧困層にアクセス出来る調査が実施可能になるぞ！
2. 住民の参加・選択・決定の自由を保障することによって、主体性が生まれるぞ！
3. 共通の目標に向かって、様々なアクターが連携し、一人一人に行き届いた支援と大きなインパクトの実現が可能になるぞ！

まとめ 「人間の安全保障」 とは意識化のツール

体系的に意識していなかった人間の安全保障の観点を意識するようになった。

ただし、
 ・概念があやふや
 ・水戸黄門の印籠になってしまう危険性
 ため、過去の事例を人間の安全保障の観点から分析すべき。

宣言！

今日から我々は手に
手を取り合い頑張っ
ちやいます！！

総括セッション
人間の安全保障
～現場で私達はこう考えた～

1. 実施上の留意点
2. 一人一人の笑顔のために連携しよう！

1. 実施上の留意点

- エンパワーメント
- 出入口の自由を確保した住民の内発的能力開発をしなきゃ！

1. 実施上の留意点

- 社会的弱者への配慮
- 援助が届いてなかった人達に届く援助：
JICA-NGOでお互い見えなかった部分が見えて来るぞ！！

1. 実施上の留意点

- 主流化ではなく配慮
- 水戸黄門の印籠ではない！

1. 実施上の留意点

- 評価
- 定性定量では測れない変化やプロセスも含めた手法の確立が必要。まずは事例研究から始めよう！

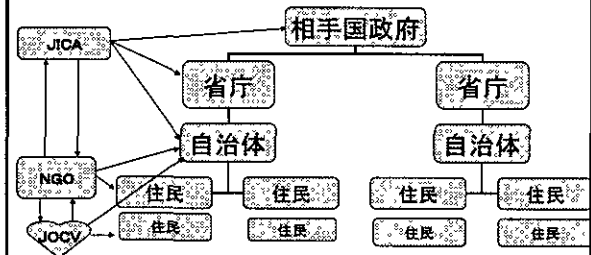
言ってみれば、.....

意識化のための ツール

3. アクター連携のためのツール

- それぞれの強みを活かすんだ！
- JICA-NGO以外のアクター（行政・民間アクター）も一緒に、みんなで「共通の目標」に向かって頑張ろう！

住民一人一人の笑顔のために私達に出来ること



- エンパワメント（入り口の自由出口の自由を確保した内発的能力開発）
- 社会的弱者への配慮（援助が届いてなかった人達に届く援助：お互い見えなかった部分が見えてきた）
- 評価←定性定量では測れない変化やプロセスも含めた手法の確立が必要。まずは事例研究から始めよう！（指標の確立等）
- 主流化ではなく配慮
- アクター連携のためのツール
- 意識化のためのツール

6. 全体会Ⅱ

進行役
向井 一朗



1. 目的

このセッションは、国内研修最後のセッションとして、国内研修で学んだこと、気付いたこと、考えたこと、議論したことをふりかえり、研修の成果を踏まえつつ、日常を離れた研修という場から日常の世界への橋渡しを行い、研修の成果を持続的に活用できるきっかけを提供することを目的とした。

また、同時に、それぞれが自分自身のふりかえり、気付き、今後実現したいことを書き出し、シェアすることにより、研修の成果を自分なりに整理し、研修終了後にどのような具体的アクションをとるのかについても検討した。

2. セッションの流れ

全体を分科会のバランスに配慮しつつ4グループに分け、それぞれのグループで、以下の3段階の個人作業及びグループ内シェアを行った。

- (1) 「人間の安全保障」の概念で自分が大切にしたい視点を3つと、なぜその視点を大切にしたいと考えるのかを個人であげ、グループ内でシェアする。
- (2) 「人間の安全保障」の視点で、自分が特に大切にしたいと思うものを一つあげ、その視点を自分の働き場である組織で活かすには、どのような工夫ができるのか検討し、グループ内でシェアする。
- (3) 「人間の安全保障」の視点を取り入れて、自分または自分の所属する組織で、実現したいことを表明し、それを実現するために1ヶ月以内、3ヶ月以内、半年以内、1年以内にやるべきアクションと、3年後になっていたい姿について考え、それをグループ内でシェアする。

3. セッションをふりかえって

このセッションでは、ワークシートの作成とシェアを通じ、自分なりの研修のふりかえりとまとめを行うとともに、そこから今後の自分の取るべきアクションを表明し、参加者同士でシェアすることで、研修を単なる学びの場に終わらせることなく、研修から今後の具体的アクションへのきっかけ作りとなったのではと考える。

